

キャンパス

三 探 訪 三

崇城大学



フライトシミュレーターを使って訓練する平金さん（空港キャンパス内で）

熊本空港に隣接する崇城大学空港キャンパス（熊本県菊陽町）。工学部で航空操縦学を専攻するパイロット志望の学生たちが、日々、同空港の滑走路を利用して訓練を重ねている。パイロットの養成課程がある大学は全国的にも珍しい。しかも、大学施設が空港に直結する私大は国内で同大のみ。計15機の訓練機で、豊富な経験を持つ航空会社や自衛隊の元パイロットが学生を指導する。訓練設備や指導を自前で完結

パイロット養成 自前で完結



しているのが特長だ。

「寒気の流入により筋状の雲が発生しています」。

強い寒気が日本の上空に流れ込んだ2月上旬。元海上自衛官の川口進教官(61)の研究室では、フライト訓練前に3年生の平金さん(21)が、気象情報や機体の整備状況を教官に伝える「ブリーフィング」に臨んだ。

平金さんは、天気図を示して熊本空港と訓練空域の雨雲、雪雲の状況を説明した。この日は午前中の気温が氷点下まで下がり、雪も舞っていた。平金さんは「飛行不可能」と判断し、午前中は離着陸訓練と飛行を中止

■メモ 1949年、熊本市に創設された私塾「電気・電波学校」が母体。61年に学校法人「君が淵学園」として認可され、67年に4年制の熊本工業大が誕生し、2000年に崇城大に改称した。空港キャンパスのほか、同市西区に池田キャンパスがある。芸術学部や薬学部など計5学部で、大学院生を含め計約3600人が学ぶ。



寮の食堂で昼食を取る学生たち（輝翔館の食堂で）

寮生活で育む絆

空港キャンパス内には、学生寮「輝翔館」（計174部屋）がある。鉄筋コンクリート4階建ての2棟で、同キャンパスで学ぶ航空操縦学専攻と航空整備学専攻の学生らが過ごす。食堂では平日と土曜に3食を提供する。航空操縦学専攻の3年、青柳陽風さん(21)は「みんなで楽しく食べると訓練の疲れが回復する。つまずいた部分を同期らに相談もできる」と共同生活の利点を語る。現在、新たな寮の建設と、既存の寮の改修で生活環境の改善を図っている。今年7月に完成予定の新寮は、各部屋の面積が現在の2倍の約25平方メートルで、談話室や学習室も整備する。今の寮も改築する予定で、26年3月に完成を見込む。

大学施設が空港に直結



教官から機体について教わる平金さん（右）（2月4日、熊本県菊陽町の崇城大空港キャンパスで）——いづれも秋月正樹撮影

し、午後に改めて判断するとした。川口教官は天候の変化への対応や訓練計画の組み立てなど、機長としての判断が一番大事と語る。フライト訓練はできなかったため、平金さんはキャンパス内にあるフライトシミュレーターで、視界不良

時に計器のみを頼りに操縦する「計器飛行」の訓練に切り替えた。平金さんは「空港と隣接し、実践的な訓練環境が整っている」と笑顔を見せた。

学生は、1年次は熊本市のキャンパスで一般教養科目を学び、2年次から空港

同大が2008年にパイロット養成を始めて以降、日本航空や全日空など国内19の航空会社に計194人が就職し、機長となった卒業生もいる。

平金さんは「パイロットは人の命を預かる職業。不測の事態に臨機応変に対応し、乗客にとって安全な旅を提供できるパイロットを目指したい」と力を込めた。（美根京子）